

平成28年1月21日

## 事業経過報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

都道府県教育委員会等名

神奈川県教育委員会

所在地

神奈川県横浜市中区日本大通 33

代表者職氏名

教育長 桐谷 次郎

平成27年度英語教育強化地域拠点事業における事業経過報告書を提出します。

## 1. 事業の実施期間

委託を受けた日 ～ 平成28年3月31日

## 2. 強化地域拠点の学校名 (学校数が多い場合は欄を追加すること)

ふりがな	よこすかしりつたどしょうがっこう	ふりがな	こすげ てつや
学校名	横須賀市立田戸小学校	校長名	小菅 哲也
ふりがな	よこすかしりつすわしょうがっこう	ふりがな	あべ ゆうこ
学校名	横須賀市立諏訪小学校	校長名	阿部 優子
ふりがな	よこすかしりつときわしょうがっこう	ふりがな	よしだ わいち
学校名	横須賀市立常葉中学校	校長名	吉田 和市
ふりがな	よこすかしりつよこすかそうごうこうとうがっこう	ふりがな	なかやま しゅんじ
学校名	横須賀市立横須賀総合高等学校	校長名	中山 俊史

## 3. 研究内容

## (1) 研究開発課題

小学校における英語教育の早期化・教科化に向けた指導と評価の在り方及び小・中・高等学校を通じた系統的な英語教育の在り方の検証

課題1 教育課程の編成

課題2 指導と評価及び指導体制

## (2) 研究の概要

## ①教育課程の編成に関わること

- ・小学校低学年で活動型(年間10コマ)、中学年で活動型(週1コマ・年間35コマ)、高学年で教科型(週3コマ・年間105コマ)を実施するための教育課程の編成
- ・活動型指導の教材『Hi, friends!』に基づく、既存の横須賀市標準カリキュラムの改訂
- ・教科型指導における新たな横須賀市標準カリキュラムの開発・研究

- ・小・中・高等学校を系統的につなぐカリキュラムの研究
- ・小学校での教科化の成果を生かした、中学校におけるカリキュラムの編成
- ・モジュール型授業の実施に向けた教育課程の検討と試行

#### ②指導と評価、及び指導体制に関わること

- ・小・中・高等学校を系統的につなぐ CAN-DO リスト形式の学習到達目標の設定
- ・学習到達目標を達成するための指導方法と評価方法に関わる研究
- ・小学校における 4 技能の評価方法についての研究・実践・検証
- ・小学校における学級担任、ALT、専科教員の役割と効果的な指導体制に関わる研究

### (3) 現状の分析と仮説等

#### ①現状の分析と研究の目的

##### ア 現状分析

横須賀市では、高学年だけでなく低・中学年においても年間 10 コマの外国語活動に取り組んできた。そのため、『Hi, friends!』の内容に基づいた 6 学年分の横須賀市の標準カリキュラムを作成したり、すべての授業に ALT を配置したりするなど、指導環境の整備を進め、外国語活動への研究に取り組んできた。

また、横須賀市は平成 28 年度の「小中一貫教育」の実施に向けて、これまでに「小中学びをつなぐ研究会」や「小中一貫教育推進校」が義務教育 9 年間の学びの系統性や連続性を重視した教育の在り方について研究を進めてきた。

現状として、中学校入学時において、物怖じすることなく英語の授業に臨む姿が多く見られ、個人差はあるもののコミュニケーション能力の素地が養われ、小学校外国語活動の一定の成果がうかがえる。

##### イ 研究の目的

小学校における「活動型」「教科型」それぞれのカリキュラムの研究・開発と指導方法、評価方法について研究を推進するとともに、小・中・高等学校を系統的につなぐ学習到達目標の設定とその達成のための効果的な指導と評価について検証する。

#### ②研究仮説

小・中・高等学校を系統的につなぐ学習到達目標を設定し、各校種における適切な指導と評価を進めることで、小学校で英語教育が早期化・教科化された場合の指導の在り方や中・高等学校の目標・指導の高度化を具体化することができる。

##### ウ 手段

教育課程については、小学校低学年で活動型（年間 10 コマ）、中学年で活動型（週 1 コマ 年間 35 コマ）、高学年で教科型（1 年次は 6 年生のみ週 1 コマ、2 年次は 5、6 年生で週 2 コマ、3 年次は 5、6 年生で週 3 コマ（うちモジュール 1 コマ）・年間 105 コマ）を編成する。

指導方法は、活動型は「Hi, friends!」及び「Hi, friends!」準拠デジタル教材を効果的に活用する。また、必要に応じて独自教材を作成し、活用する。教科型は、文部科学省が平成 26 年度

に作成予定の補助教材を活用し、文字指導についても研究していく。

また、小学校拠点校に英語科専科教員を配置し、教育課程上のカリキュラムの編成、小学校教員への指導助言及び教科型の授業を担当する。

中学校は小学校における英語教育の早期化、教科化を受け、綿密な小中高連携のもと小学校における指導内容等の実態を確実に把握し、小学校の教育課程編成について中学校の視点から助言を行う。また、高等学校の「授業は英語で行うことを基本とする。」ことに対応すべく目標を高度化していく。

高等学校は、中学校における英語教育の目標及び内容の高度化を受け、綿密な小中高連携のもと小・中学校における指導内容等の実態を確実に把握し、小・中学校の教育課程編成について高等学校の視点から助言を行う。また、中学校での「授業は英語で行うことを基本とする。」ための実践を受け、英語による発表、討論、交渉といった言語活動に適応できるように高度化を図る。

#### エ 期待できる成果

小学校中学年までに外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しみ、コミュニケーション能力の素地が養われ、その結果、高学年において、現行の外国語活動の良さを生かしながら、「聞くこと」「話すこと」など外国語表現の能力の基礎を養うことが期待できる。また、「読むこと」「書くこと」にも仲間と関わり合いながら取り組ませることで、外国語理解の能力の素地を養い、中学校においてスムーズに英語の読み書きの活動に移行できることが期待できる。

小学校での取組を受けて、中学校では、身近な話題について、自分の考えなどを話したり書いたりすることができたり、話し手や書き手の意向が理解できるになることが期待される。

高等学校においては、自分の考え等を正確に伝えたり、相手の発話に反応したりするなどディベートやディスカッションをすることができるようになることが期待される。

#### ③研究成果の評価方法

\*以下の資料をもとに、英語教育強化推進委員会が評価・分析に取り組む。

##### ■教育課程の編成に関わること

- ・教育課程表、授業実施実績表
- ・年間指導計画、評価計画
- ・児童生徒・教員・保護者意識調査

##### ■指導と評価、及び指導体制に関わること

- ・CAN-DO リスト形式の学習到達目標
- ・児童生徒・教員・保護者を対象とした意識調査
- ・研修会における授業観察
- ・パフォーマンステスト等の実技テスト
- ・横須賀市学習状況調査（中学校）
- ・外部試験の結果分析

(4) 研究開発型 ※平成27年度新規採択件については、平成26年度は斜線を引くこと。

	開始学年及び週当たり授業時数コマ			
	第一年次 (H26)	第二年次 (H27)	第三年次 (H28)	第四年次 (H29)
①小学校 外国語活動型	第 学年 コマ	第3～5学年 1コマ	第3・4学年 1コマ	第3・4学年 1コマ
②小学校 教科型	第 学年 コマ	第6学年 1コマ	第5・6学年 2コマ	第5・6学年 2コマ

(5) 研究計画 ※平成27年度新規採択件については、第一年次から第三年次まで記載すること。

○第一年次～第四年次、校種別

◎一年次（平成27年度）

①研究校全体における取組

- ア 研究組織の確立と研究の目的、方針、内容、方法に関わる共通理解
- イ 研修会の実施（各研究校・合同）
- ウ 先進地区への視察とそれに基づく合同研修
- エ 実態調査、及び研究内容に関わる調査の実施と分析
- オ 一年次終了時における研究成果の分析、及び二年次の研究計画の見直し
- カ 児童生徒・教員・保護者に対する意識調査の実施と結果分析
- キ 公開授業の実施

②校種別の取組

ア 小学校

■教育課程の編成に関わること

- ・低学年は年間10コマ、中学年、及び第5学年は週1コマ、年間35コマの活動型授業を実施
- ・第6学年は週1コマ、年間35コマの教科型授業を実施
- ・二年次に高学年で週2コマ、年間70時間の教科型授業を実施するための教育課程の研究・編成
- ・中学年の活動型指導のための既存の「横須賀市標準カリキュラム」の改訂・再編成を検討
- ・高学年の教科型指導における『補助教材』の活用研究
- ・郷土「横須賀」を扱う独自教材開発
- ・中学校の教育課程とスムーズなつながりをつくる「ブリッジ・カリキュラム」の作成検討
- ・中・高等学校での授業参観、研究協議

■指導と評価、及び指導体制に関わること

- ・活動型における到達目標の設定と指導方法の研究
- ・教科型における4技能の到達目標の設定と指導方法・評価方法の研究
- ・パフォーマンステスト（スピーチや会話テスト等）の研究・実施
- ・教科型における「読むこと」「書くこと」、「文字の扱い」「発音と綴りの関係」に関わる指導方法の研究

\* 学習状況の変容については定量的に把握する

- ・ ALT 不在の HRT 又は専科教員による授業の実践・検証・改善

#### イ 中学校

##### ■教育課程の編成に関わること

- ・ 小学校外国語活動の実践と成果の理解、授業参観、研究協議での助言
- ・ 年間指導計画の見直し
- ・ 小学校英語のカリキュラムに連動し、中学校とのスムーズなつながりをつくる「ビギニング・カリキュラム」の検討
- ・ 高等学校の英語の教育課程の理解、授業参観

##### ■指導と評価、及び指導体制に関わること

- ・ 評価規準に関わる検証・改善
- ・ CAN-DO リスト形式の学習到達目標の設定
- ・ 学習到達目標達成の評価方法（パフォーマンステスト<スピーチ、会話テスト等>）の研究・実施
- ・ 高度化された言語活動の検討・実践・検証
- ・ 「英語で行う授業」の実践（目標値：教員 50%以上、生徒 30%以上／1時間）
- ・ 横須賀市学習状況調査（2年次 4月実施）の結果分析と指導改善

#### ウ 高等学校

##### ■教育課程の編成に関わること

- ・ 中学校学習指導要領・教育課程と英語教育の実態の理解
- ・ 小・中学校の英語の授業参観、研究協議での助言

##### ■指導と評価、及び指導体制に関わること

- ・ CAN-DO リスト形式の学習到達目標の設定・検証・改善
- ・ 中学校での言語活動を踏まえた、言語活動の検討及び試行
- ・ 4技能を統合的に評価するためのパフォーマンステスト<スピーチ、会話テスト等>等の研究・実施
- ・ 「英語で行う授業」の実践（目標値：教員 60%以上、生徒 40%以上／1時間）

#### ◎二年次（平成28年度）

##### ①研究校全体における取組

- ア 一年次の研究の成果と課題に基づいた研究組織等の改善
- イ 研修会の実施（各研究校・合同）
- ウ 先進地区への視察とそれに基づく合同研修
- エ 実態調査、及び研究内容に関わる調査の実施と分析
- オ 二年次終了時における研究成果の分析、及び三年次の研究計画の見直し
- カ 児童生徒・教員・保護者に対する意識調査の実施と結果分析
- キ 研究発表会の実施

##### ②校種別の取組

- ア 小学校

■教育課程の編成に関わること

- ・低学年は年間10コマ、中学年は週1コマ、年間35コマの活動型授業を実施
- ・高学年は週2コマ、年間35コマの教科型授業を実施
- ・中学年の活動型指導のための横須賀市標準カリキュラムの活用・検証・改訂
- ・高学年の教科型指導における『補助教材』の活用・検証
- ・郷土「横須賀」を扱う独自教材開発
- ・「ブリッジ・カリキュラム」の作成
- ・中・高等学校での授業参観、研究協議

■指導と評価、及び指導体制に関わること

- ・活動型授業の実践・検証・改善
- ・到達目標に基づく教科型授業の実践・検証・改善、及び評価方法に関わる検証・改善
- ・パフォーマンステスト（スピーチや会話テスト等）の研究・実施
- ・教科型における「読むこと」「書くこと」、「文字の扱い」「発音と綴りの関係」に関わる指導の実践・検証・改善
  - \*学習状況の変容については定量的に把握する
- ・ALT不在のHRTまたは専科教員による授業の実践・検証・改善

イ 中学校

■教育課程の編成に関わること

- ・小学校活動型授業・教科型授業への参観、研究協議での助言
- ・年間指導計画の改善
- ・小学校外国語教科化を踏まえた「ビギニング・カリキュラム」の作成
- ・高等学校の英語の授業参観

■指導と評価、及び指導体制に関わること

- ・評価規準に関わる検証・改善
- ・CAN-DOリスト形式の学習到達目標に基づく指導の実践・検証、及びその改訂
- ・学習到達目標達成の評価方法（パフォーマンステスト<スピーチ、会話テスト等>）の研究
- ・高度化された言語活動の検討・実践・検証
- ・「英語で行う授業」の実践（目標値：教員60%以上、生徒40%以上／1時間）
- ・横須賀市学習状況調査（2年次4月実施）の結果分析と指導改善

ウ 高等学校

■教育課程の編成に関わること

- ・小・中学校の英語の授業参観、研究協議での助言

■指導と評価、及び指導体制に関わること

- ・CAN-DOリスト形式の学習到達目標に基づく指導の実践・検証、及びその改訂
- ・中学校での言語活動を踏まえた言語活動の実践、目標の高度化
- ・4技能を統合的に評価するためのパフォーマンステスト<スピーチ、会話テスト等>等の実施
- ・「英語で行う授業」の実践（目標値：教員70%以上、生徒50%以上／1時間）

◎三年次（平成29年度）

【コマ数変更の理由】児童の学習の様子や学校の状況等を総合的に判断し、2コマが妥当と判断したため。

①研究校全体における取組

- ア 二年次の研究の成果と課題に基づいた研究組織等の改善
- イ 研修会の実施（各研究校・合同）
- ウ 実態調査、及び研究内容に関わる調査の実施と分析
- エ 二年次終了時における研究成果の分析、及び三年次の研究計画の見直し
- オ 児童生徒・教員・保護者に対する意識調査の実施と結果分析
- カ 研究発表会の実施

②校種別の取組

ア 小学校

■教育課程の編成に関わること

- ・低学年は年間10コマ、中学年は週1コマ、年間35コマの活動型授業を実施
- ・高学年は週2コマ、年間70コマの教科型授業を実施
- ・中学年の活動型指導のための横須賀市標準カリキュラムの活用・検証・改訂
- ・高学年の教科型指導における『補助教材』の活用・検証
- ・郷土「横須賀」を扱う独自教材の活用・検証
- ・「ブリッジ・カリキュラム」による授業の検証
- ・中・高等学校での授業参観、研究協議

■指導と評価、及び指導体制に関わること

- ・活動型授業の実践・検証・改善
- ・到達目標に基づく教科型授業の実践・検証・改善、及び評価方法に関わる検証・改善
- ・パフォーマンステスト（スピーチや会話テスト等）の研究・実施
- ・教科型における「読むこと」「書くこと」、「文字の扱い」「発音と綴りの関係」に関わる指導の実践・検証・改善
- ＊学習状況の変容については定量的に把握する
- ・ALT不在のHRT又は専科教員による授業の実践・検証・改善

イ 中学校

■教育課程の編成に関わること

- ・小学校活動型授業・教科型授業への参観、研究協議における助言
- ・小学校外国語教科化を踏まえた「ビギニング・カリキュラム」による授業の検証
- ・高等学校の英語の授業参観、研究協議

■指導と評価、及び指導体制に関わること

- ・評価規準に関わる検証・改善
- ・CAN-DOリスト形式の学習到達目標に基づく指導の実践・検証、及びその改訂
- ・学習到達目標達成の評価方法（パフォーマンステスト＜スピーチ、会話テスト等＞）の研究
- ・高度化された言語活動の検討・実践・検証
- ・「英語で行う授業」の実践（目標値：教員70%以上、生徒50%以上／1時間）

- ・横須賀市学習状況調査（2年次4月実施）の結果分析と指導改善

#### ウ 高等学校

##### ■教育課程の編成に関わること

- ・小・中学校の英語の授業参観、研究協議での助言

##### ■指導と評価、及び指導体制に関わること

- ・CAN-DO リスト形式の学習到達目標に基づく指導の実践・検証、及びその改訂
- ・中学校での言語活動を踏まえた言語活動の高度化、目標の高度化、
- ・4技能を統合的に評価するためのパフォーマンステスト<スピーチ、会話テスト等>等の実施
- ・「英語で行う授業」の実践（目標値：教員80%以上、生徒50%以上／1時間）

#### ○平成27年度の進捗状況・課題

##### ①研究全体における取組

##### ア「研究組織の確立と研究の目的、方針、内容、方法に関わる共通理解」について

- ・英語教育強化地域拠点事業の採択に向けて研究組織を編成したが、実際に研究を推進する上で実態と一致しない状況や運営面での不都合があった。このため第1回の英語教育強化推進委員会で意見を求め、改善を図った。
- ・研究の目的や方針、内容、方法については、研修会や公開授業に関わる協議会を経て、研究開発校には共通理解が生まれ、それぞれの校種、立場から新たな視点やアイデアが生まれた。
- ・小学校においては、現行の学習指導要領による「外国語活動」への理解を深め、授業の充実が最優先課題となった。中・高等学校においても、これまでの授業を見直す機会が生まれ、「英語による英語の授業」や「言語活動の高度化」を意識した実践が見られた。
- ・研究組織の運営については、一年目の研究を振り返りながら年間を見通して計画的に進めていく。更に研究開発校の連携するための会議の設定を行う。

##### イ「研修会の実施（各研究校・合同）」について

- ・有識者、指導主事による研修会を年間を通じて行った。学習指導要領の改訂に伴う「小学校における英語教育の早期化・教科化、中・高等学校における高度化」への理解や指導と評価の在り方、指導案の検討や授業の振り返りなどをテーマに研修会を実施し、研究の方向性について共通理解を図ることができた。
- ・大きな転換期を迎える小学校での研修が中心となり、中・高等学校を対象とする研修会の充実が課題として残った。「英語による英語の授業」の展開の在り方や「言語活動の高度化」に向けた研修会を開催していく。

##### ウ「先進地区への視察とそれに基づく合同研修」について

- ・先進地区として沖縄県を選び、視察を行った。研究開発校には、外国につながる児童・生徒が多く在籍することから、その児童・生徒が自己肯定感を育むことができる授業づくりについても視察のねらいとなった。
- ・視察参加者が各校で報告を行うとともに、第2回英語教育強化推進委員会でも報告を行い、



その成果について共有する機会を設定した。

- ・徳島県へは小学校の研究主任が、次年度の公開授業や実地調査に向けて視察を行った。
- ・次年度は、視察の成果をそれぞれの授業で具体化する。また、新年度の早い時期に新たな視点で視察を行い、その成果を生かせるよう授業実践を進める。

エ「実態調査、及び研究内容に関わる調査の実施と分析」について

- ・それぞれの校種における授業の実態についての把握を進め、その課題について共通認識を持つにとどまった。授業づくりにおける課題は、研究協議の中で明らかにし、有識者や指導主事の指導・助言をもとに改善策をあげた。
- ・研究内容に関わる調査の実施と分析の手段について検討を進める。

オ「一年次終了時における研究成果の分析、及び二年次の研究計画の見直し」について

- ・研究授業や日々の授業を通して、横須賀市の外国語教育における成果と課題が見られた。この結果から2年目の研究推進の方向性を探り、より現実性のある研究計画を作成する。

カ「児童生徒・教員・保護者に対する意識調査の実施と結果分析」について

- ・児童生徒の意識調査の内容や設問について調査・研修部会で検討を進めた。研究に求められるデータとして、どのようなものがふさわしいのかを探った。
- ・教員・保護者を対象とした意識調査については準備を進めている。2年目は、早い時期に実施できるように検討を進める。

キ「公開授業の実施」について

- ・小学校

6月30日 研究開発校への公開授業（6年生）

10月28日 常葉中ブロック小中一貫教育に関わる公開授業（1～6年生 計8学級）

- ・中学校

10月28日 常葉中ブロック小中一貫教育に関わる公開授業（2年生）

12月 4日 外国人英語教員（FLT）活用事業（1年生）

2月 日 研究開発校への公開授業

- ・高等学校

10月27日 外国人英語教員（FLT）活用事業（英語会話）

11月17日 横須賀市高等学校教育課程研究会（2年次）

- ・小・中学校は隣接又は近隣にあるため、空いた時間にお互いの授業を見合うことができ、公開授業にも積極的な参観があったが、高等学校は地理的な条件等で多くの参加者が期待できなかった。
- ・日程調整を十分に行い、更に交流の機会をつくることで他校種の指導への理解を深める。

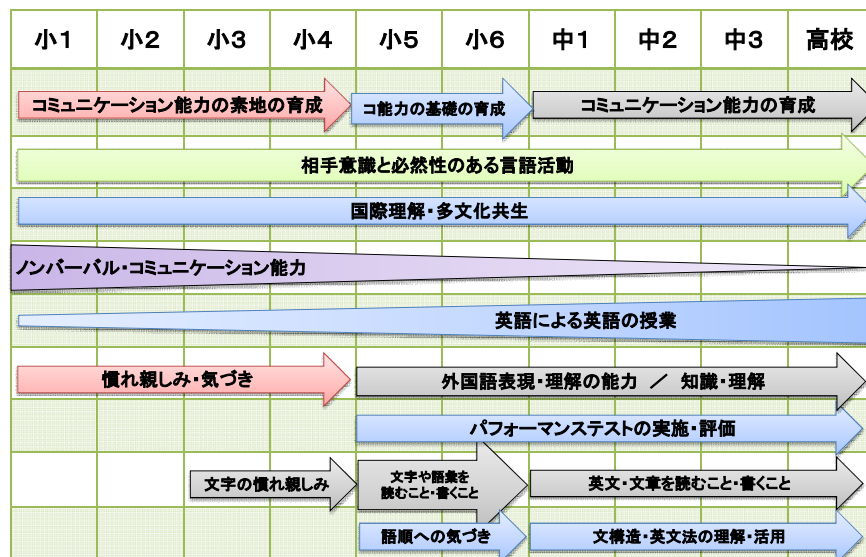
## ②校種別の取組

ア 小学校

- 教育課程の編成に関わること

- ・低学年の年間10時間は、横須賀市のこれまでの取組のとおり実施した。授業時間は、余剰時間を活用した。1年生から外国語活動に取り組むことの意義を再確認し、実践に取り組んだ。
- ・中学年の年間35時間は、これまでの外国語活動の余剰時間10時間と総合的な学習の時間からの25時間で実施した。総合的な学習の時間の時間数減については、外国語活動とのクロスカリキュラムとして内容の充実に努めた。
- ・高学年は外国語活動の35時間で実施。
- ・2年目は、低学年で年間10時間、中学年は年間35時間、高学年は年間70時間として実施予定。中・高学年は、今後、文部科学省が示す新学習指導要領の時間数に従って、授業時間数を確保する。
- ・横須賀市外国語活動標準カリキュラム『ハッピータイム』は、中学年を対象として改訂・再編成を行った。2年目は更にこの活用を進め、その検証と改訂に取り組む。
- ・『補助教材』は、10月以降（後期）から活用を開始した。45分の授業時間の一部を使って不定期に活用した。2年目以降、その活用について、研究を深めていく。
- ・郷土「横須賀」を扱う独自教材開発は、具体的なものには至らなかったが、「道案内をしよう」や「友だちを旅行にさそおう」などの単元で、横須賀を舞台とした言語活動ができるようにアレンジを加えた。
- ・中学校の教育課程とのつながりを意識して指導を進めたことで、明確な9年間の授業づくりの「軸」を設定することが必要となった。

## 授業づくりの「軸」を考える(検討中)



- ・中・高等学校での授業参観や研究協議により、それぞれの校種の実態把握が進んだ。2年目は、共通の課題を持って交流を進める。

### ■指導と評価、及び指導体制に関わること

- ・積極的なコミュニケーションが図れるように必然性のある活動の場面をつくりだすことに努め、相手意識を持った活動となる言語活動を設定した。それに伴う「到達目標」の設定に取

り組んだ。

- ・教科としての外国語では、これまでの外国語活動とは異なる、中学校の学習につながる新たな「評価の観点」が必要となった。2年目の研究の中で具体化していく。
- ・パフォーマンステストは、専科教員又は学級担任が児童の活動状況を「到達目標と照らし合わせながら見とる」だけにとどまっている。評価基準やルーブリックなどが必要である。
- ・「読むこと」「書くこと」、「文字の扱い」「音声と綴りの関係」の指導法についてはこれから研究を進めていく。中学校における「読むこと」「書くこと」の指導とはねらいが異なることを学校が理解する必要がある。今後は研修会を設定して共通理解を図る必要がある。
- ・学習状況の変化について「定量的な把握」を計画していたが、具体的な手段がなかった。2年目は「外部試験」の実施を検討する。
- ・言語活動において必然性のある場面設定をするためにALTの効果的な活用を目指した。しかし、2年目に高学年で時間数が70時間となった場合にALTの配置ができない授業がある。学級担任、専科教員による授業の実践・検証を進めていく。

## イ 中学校

### ■教育課程の編成に関わること

- ・公開授業や日々の授業参観を通じて、小学校外国語活動の実践やその成果について理解が進んだ。
- ・年間指導計画の見直しは進まなかった。
- ・小中学校相互の授業参観を進めたことで、小学校外国語活動の成果を十分に生かせる中学校の授業づくりへの意識が高まった。小学校で培われたコミュニケーション能力の素地を生かした中学校での指導の在り方について研究を進める。ペアワークやグループワークの進め方、アルファベット・ジングルからフォニックスへの接続、英語による英語の授業の可能性など次年度への課題が明らかとなった。
- ・高等学校の授業を再認識する機会を得たことで、中学校における到達目標の改善を意識することができた。

### ■指導と評価、及び指導体制に関わること

- ・CAN-DO リストは作成までにとどまり、検証までに至らなかった。2年目にはCAN-DO リストに基づいた指導と評価を進めながら改訂を行う。
- ・ネイティブ・スピーカーの活用をすすめ、パフォーマンステストに取り組んだ。評価基準の充実やルーブリックの設定が必要である。
- ・「50%以上英語で行う英語の授業」の割合は教員で56.4%であった。また、外国人英語教員（臨時教員免許状を持つネイティブ・スピーカー）の授業は、ほぼ100%の英語使用率で授業が展開されている。この授業にも生徒は物怖じすることない姿が見られる。
- ・横須賀市学習状況調査（民間企業の作成、受験者数 全国131,500人）の結果はおおむね良好で全国平均を上回っている。詳細についての分析は進まなかった。

## ウ 高等学校

### ■教育課程の編成に関わること

- ・中学校学習指導要領・教育課程と英語教育の実態についての理解を深めるための機会が設定

できなかった。

- ・小・中学校の授業参観の参加者は少数となった。

■指導と評価、及び指導体制に関わること

- ・CAN-DO リストは作成までにとどまり、検証までに至らなかった。2年目にはCAN-DO リストに基づいた指導と評価を進めながら改訂を行う。
- ・言語活動の充実については、教育課程研究会の公開授業で一定の成果を見ることができ、その後の協議会でも協議の柱となり、意識が高まった。日常的に意識的に言語活動の充実を図る必要がある。
- ・パフォーマンステストは実施されているが、ペーパーテストによるウェイトが大きく、評価に十分に生かされていない。評価基準の充実やループリックの設定が必要である。
- ・外国人英語教員（臨時教員免許状を持つネイティブ・スピーカー）の授業は、ほぼ100%の英語使用率で授業が展開されている。一方で日本人の教員は、英語使用率に大きな課題がある。

(6) 評価計画 ※平成27年度新規採択件については、第一年次から第三年次まで記載すること。

○第一年次～第四年次、校種別

◎一年次（平成27年度）

ア 小学校（年度末に4年生と6年生及び関係者を対象に実施）

■教育課程の編成に関わること

- ・教育課程表、授業実施実績表の記載内容の確認
- ・教員・保護者を対象とした意識調査の実施・結果分析

■指導と評価、及び指導体制に関わること

- ・研修会における授業観察、その成果と課題の分析
- ・児童・教員・保護者を対象とした意識調査の実施・結果分

イ 中学校（年度末に1年生及び関係者を対象に実施）

■教育課程の編成に関わること

- ・教員・保護者を対象とした意識調査の実施・結果分析

■指導と評価、及び指導体制に関わること

- ・研修会における授業観察、その成果と課題の分析
- ・学習到達目標と評価結果についての分析
- ・パフォーマンステスト等の結果分析
- ・横須賀市学習状況調査・外部試験の結果分析
- ・生徒・教員・保護者を対象とした意識調査の実施・結果分析

ウ 高等学校（年度末に実施）

■教育課程の編成に関わること

- ・教員・保護者を対象とした意識調査の実施・結果分析

■指導と評価、及び指導体制に関わること

- ・研修会における授業観察、その成果と課題の分析
- ・パフォーマンステスト等の結果分析

◎二年次（平成28年度）

ア 小学校（年度末に4年生と6年生及び関係者を対象に実施）

- 教育課程の編成に関わること
  - ・教育課程表、授業実施実績表の記載内容の確認
  - ・教員・保護者を対象とした意識調査の実施・結果分析
- 指導と評価、及び指導体制に関わること
  - ・研修会における授業観察、その成果と課題の分析
  - ・パフォーマンステスト等の結果分析
  - ・児童・教員・保護者を対象とした意識調査の実施・結果分析

イ 中学校（年度末に1年生及び関係者を対象に実施）

- 教育課程の編成に関わること
  - ・教員・保護者を対象とした意識調査の実施・結果分析
- 指導と評価、及び指導体制に関わること
  - ・研修会における授業観察、その成果と課題の分析
  - ・学習到達目標と評価結果についての分析
  - ・パフォーマンステスト等の結果分析
  - ・横須賀市学習状況調査・外部試験の結果分析
  - ・生徒・教員・保護者を対象とした意識調査の実施・結果分析

ウ 高等学校（年度末に実施）

- 教育課程の編成に関わること
  - ・教員・保護者を対象とした意識調査の実施・結果分析
- 指導と評価、及び指導体制に関わること
  - ・学習到達目標と評価結果についての分析
  - ・研修会における授業観察、その成果と課題の分析
  - ・パフォーマンステスト等の結果分析
  - ・外部試験の結果分析

◎三年次（平成29年度）（3年次には研究仮説の正否を確認する）

ア 小学校（年度末の4年生と6年生及び関係者を対象に実施、ただし、1，2年次の状況を勘案し、対象の増減をについて検討する）

- 教育課程の編成に関わること
  - ・教育課程表、授業実施実績表の記載内容の確認
  - ・教員・保護者を対象とした意識調査の実施・結果分析
- 指導と評価、及び指導体制に関わること
  - ・研修会における授業観察、その成果と課題の分析

- ・パフォーマンステスト等の結果分析
- ・児童・教員・保護者を対象とした意識調査の実施・結果分析

イ 中学校（年度末に1年生及び関係者を対象に実施、ただし、1，2年次の状況を勘案し、対象の増減をについて検討する）

■教育課程の編成に関わること

- ・教員・保護者を対象とした意識調査の実施・結果分析

■指導と評価、及び指導体制に関わること

- ・研修会における授業観察、その成果と課題の分析
- ・学習到達目標と評価結果についての分析
- ・パフォーマンステスト等の結果分析
- ・横須賀市学習状況調査・外部試験の結果分析
- ・児童・教員・保護者を対象とした意識調査の実施・結果分析

ウ 高等学校（年度末に実施）

■教育課程の編成に関わること

- ・教員・保護者を対象とした意識調査の実施・結果分析

■指導と評価、及び指導体制に関わること

- ・学習到達目標と評価結果についての分析
- ・研修会における授業観察、その成果と課題の分析
- ・パフォーマンステスト等の結果分析
- ・外部試験の結果分析

○平成27年度の進捗状況・課題

ア 小学校（年度末に4年生と6年生及び関係者を対象に実施）

■教育課程の編成に関わること

「教育課程表、授業実施実績表の記載内容の確認」について

- ・研究計画書に示した授業時数に合わせて実施した。

「教員・保護者を対象とした意識調査の実施・結果分析」について

- ・年度末での実施、結果分析に向けて準備を進めている。次年度は早い時期に実施できるように進める。

■指導と評価、及び指導体制に関わること

「研修会における授業観察、その成果と課題の分析」について

- ・それぞれの公開授業の研究協議では、その成果と課題を共有することができた。外国語活動、又は、教科としての指導についての理解を深め、次の授業への課題を明らかにすることができた。
- ・2年目は、その課題と成果を明文化し、具体的なものとしてまとめる。

「児童・教員・保護者を対象とした意識調査の実施・結果分析」について

- ・年度末での実施、結果分析に向けて準備を進めている。

イ 中学校（年度末に1年生及び関係者を対象に実施）

■教育課程の編成に関わること

「教員・保護者を対象とした意識調査の実施・結果分析」について

- ・年度末での実施、結果分析に向けて準備を進めている。次年度は早い時期に実施できるように進める。

■指導と評価、及び指導体制に関わること

「研修会における授業観察、その成果と課題の分析」について

- ・それぞれの公開授業の研究協議では、その成果と課題を共有することができた。2年目は、その課題と成果を明文化し、具体的なものとしてまとめる。

「学習到達目標と評価結果についての分析」「パフォーマンステスト等の結果分析」について

- ・学習到達目標を設定し、パフォーマンステスト等を実施しながら評価に取り組んだが、その結果分析までに至らなかった。初年度を振り返りながら、到達目標やパフォーマンステストのねらいや進め方について、より妥当性の高いものへと改訂していく必要がある。

「横須賀市学習状況調査・外部試験の結果分析」について

- ・横須賀市学習状況調査（民間企業の作成、受験者数 全国 131,500 人）の結果はおおむね良好で全国平均を上回っている。詳細についての分析は進まなかった。
- ・外部テストは3年生に対して「英検 I B A ・テスト C」を実施した。結果は以下の通り。

英検級レベル	人数	割合	合計
準2級レベル以上	9人	5.9%	5.9%
準2級レベル	26人	17.1%	23.0%
3級レベル	76人	50.0%	73.0%
4級レベル	37人	24.3%	97.3%
4級・5級受験レベル	4人	2.6%	99.9%
合計	152人	99.9%	99.9%

\*100%に満たないのは、小数点第2位以下の四捨五入によるもの

- ・生徒・教員・保護者を対象とした意識調査の実施・結果分析

「児童・教員・保護者を対象とした意識調査の実施・結果分析」について

- ・年度末での実施、結果分析に向けて準備を進めている。

ウ 高等学校（年度末に実施）

■教育課程の編成に関わること

「教員・保護者を対象とした意識調査の実施・結果分析」について

- ・年度末での実施、結果分析に向けて準備を進めている。次年度は早い時期に実施できるように進める。

■指導と評価、及び指導体制に関わること

「研修会における授業観察、その成果と課題の分析」について

- ・それぞれの公開授業の研究協議では、その成果と課題を共有することができた。
- ・2年目は、その課題と成果を明文化し、具体的なものとしてまとめる。

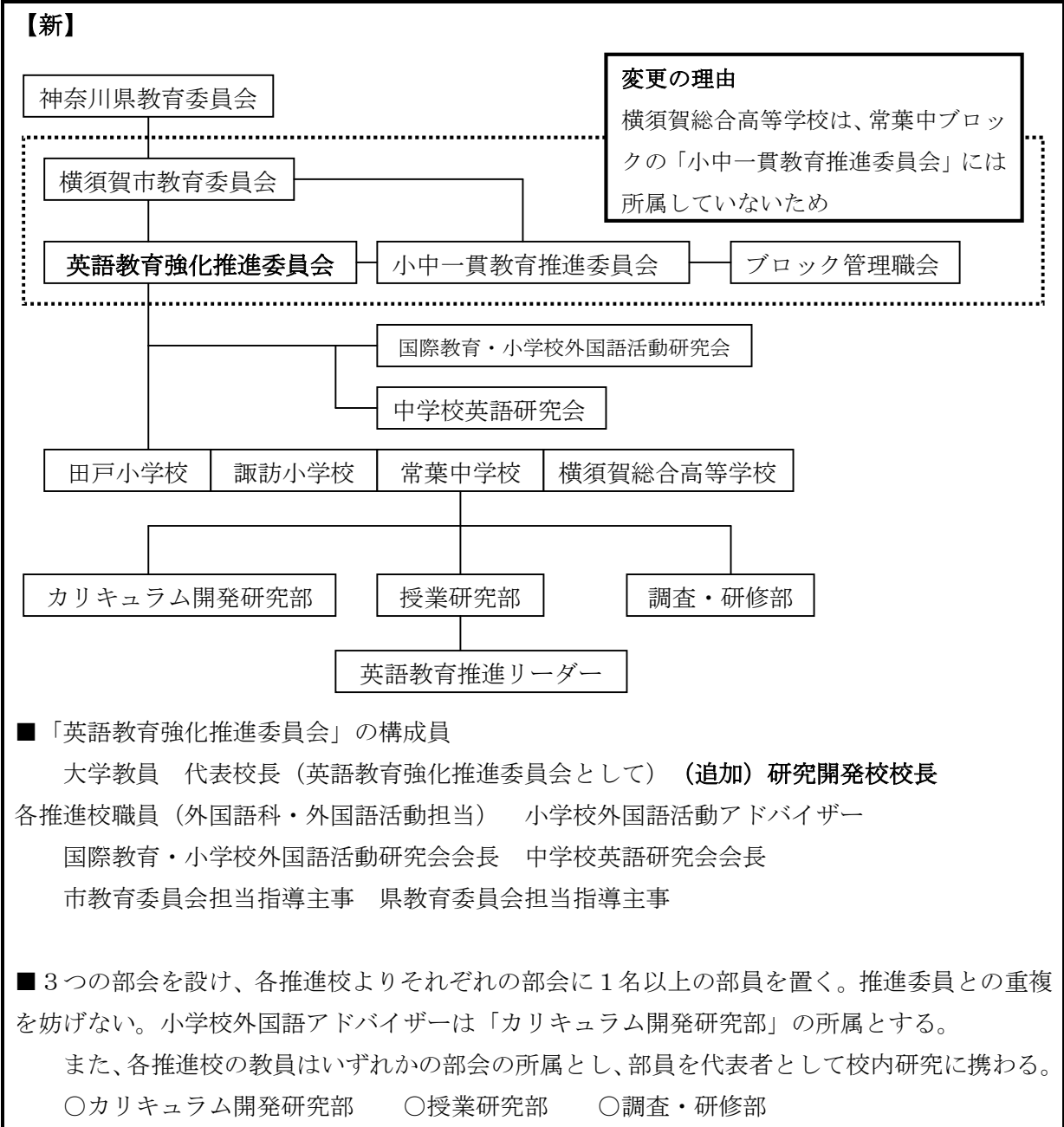
「学習到達目標と評価結果についての分析」「パフォーマンステスト等の結果分析」について

- ・学習到達目標を設定し、パフォーマンステスト等を実施しながら評価に取り組んだが、その結果分析までに至らなかった。初年度を振り返りながら、到達目標やパフォーマンステスト

のねらいや進め方について、より妥当性の高いものへと改訂していく必要がある。  
 ・外部テストは1・2年生に対して「英検 I B A ・テスト B」を実施の予定。

4. 研究組織

(1) 研究組織の概要



(2) 運営指導委員会（英語教育強化推進委員会）

①活動計画

○活動計画

■英語教育強化推進委員会

- ・年間5回実施（5月、7月、9月、12月、2月）
- ・英語教育強化地域拠点事業の運営に関わる協議を行う。



- ・部会の活動状況を把握し、調整・指導に当たる。

#### ■部会

##### ○カリキュラム開発研究部会（年間5回）

- ・小学校における授業時間数に関わる研究・調査
- ・小学校活動型授業、教科型授業のカリキュラムの開発・研究
- ・小学校における「ブリッジ・カリキュラム」中学校における「ビギニング・プログラム」の開発・研究
- ・中・高等学校における年間指導計画

##### ○授業研究部（年間5回）

- ・CAN-DO リスト形式の学習到達目標に基づく指導の実践・検証、及びその改訂
- ・評価に関わる調査・研究
- ・パフォーマンステスト等に関わる研究・調査

##### ○調査・研修部（年間5回）

- ・異校種間における授業参観の計画・実施・研修会の運営
- ・児童・教員・保護者を対象とした意識調査の実施・結果分析
- ・外部試験の実施・結果分析
- ・他地域の視察・報告

#### ○平成27年度の進捗状況・課題

##### ■英語教育強化推進委員会

- ・研究開発校の学校長が研究の進捗状況等を十分に把握できるように、各学校長が推進委員会の委員となることとした。その一方で構成メンバーが多くなり招集が難しくなった。
- ・年間5回を計画していたが、研究開発校4校の委員が集える日程が調整しきれないこともあり、年間3回の開催となった。初年度の取組をとおして委員会の役割も共有化されたので、それぞれの研究開発校の年間予定を調整する中で、推進委員会を設定していく。
- ・各部会の進捗状況を報告することで、研究委託の全体像の把握が進んだ。小・中学校のそれぞれの研究会会長・副会長からは、この研究での成果を市内全体へ発信することを促された。
- ・研究の初年度に当たり、各部会の取組は手探りであったため、それに対しての調整・指導には至らなかった。

#### ■部会

##### ○カリキュラム開発部会（年間5回実施）

「小学校における授業時間数に関わる研究・調査」について

- ・高学年の年間70時間の時間数確保について検討を進めた。結果として、平成28年のはじめまでに示される新教育課程に基づいた授業時間数で実施しすることを検討している。

「小学校活動型授業、教科型授業カリキュラムの開発・研究」について

- ・これまでの外国語活動の授業に課題があったため、外国語活動への理解・充実が最優先の課題となった。そのため教科型の授業については開発・研究は、これから充実させていく。
- ・これまで横須賀市の標準カリキュラムとしてきた『ハッピータイム』の改訂を進め、到達目

標の設定、指導と評価について検討を進めたが、検証が十分に行えなかった。

「中・高等学校における年間指導計画」について

- ・作成にとどまっていた、その内容や文言についての検討には至らなかった。

○授業研究部会（年間5回）

- ・9年間・12年間の授業を捉え、授業づくりの「軸」についての検討を進め、小学校低学年・中学年・高学年、中学校、高等学校のそれぞれの段階における外国語教育の要素について明らかにした。拠点事業に関わる教員全てこれを意識して授業づくりができることを目指す。

「CAN-DO リスト形式の学習到達目標に基づく指導の実践・検証、及びその改訂」について

- ・CAN-DO リストの作成にとどまり、これに基づく指導の実践・検証・改訂には至らなかった。初年度の取組を基礎に、2年目の取組を展開できるようにする。

「評価に関わる調査・研究」・「パフォーマンステスト等に関わる研究・調査」について

- ・初年度を振り返りながら、到達目標やパフォーマンステストのねらいや進め方について、より妥当性の高い評価へと改訂していく必要がある。

○調査・研究部会（年間6回）

「異校種間における授業参観の計画・実施・研修会の運営」について

- ・拠点事業のみを目的とした授業参観を設定することには困難があったため、前年度より計画されていた「外国人英語教員拠点事業」に関わる研究発表や「横須賀市高等学校教育課程研究会」の授業公開も異校種交流の授業と捉えて、積極的な参加を促した。どの授業も十分に検討を行った授業であり、異校種の授業について理解が深まるものとなった。
- ・授業観察の観点を示すことができなかった。共通の視点を持って参観できる観点の作成の必要がある。

「児童・教員・保護者を対象とした意識調査の実施・結果分析」について

- ・年度末での実施、結果分析に向けて準備を進めている。

「外部試験の実施・結果分析」

- ・小学校においては、定量的な成果を示すことを計画したが、そのための手段が具体化されなかった。2年目は外部試験を実施して定量的な調査を進める。
- ・中学校においては、11月下旬に英検 I B A を3年生を対象に実施。実施規模、実施時期ともに適切であった。
- ・英検3級合格程度以上と判定された生徒の割合が73%という結果を得た。一定の成果が見られた。この結果の分析については、その方策が確立していないので、2年目以降の指導の中でどのように扱っていくかを検討していく必要がある。
- ・高等学校においては、学校行事等の関係で初年度の実施時期が3月中旬となり、その結果分析は年度を超えることになる。
- ・2年目の実施時期を検討するとともに、結果を捉え分析の方法について検討を進める。

「他地域の視察・報告」

- ・調査・研修部の管轄と設定したが、視察には各研究開発校の研究担当者が参加することとなり、報告についても研究担当者が行った。研究組織の計画と実態が一致しなかった。
- ・次年度の視察先について、研究の経緯などを考慮して検討を進めていく。

## 5. 年間事業計画

月	強化地域拠点の取組	運営指導委員会
4月	<ul style="list-style-type: none"> <li>横須賀市学習状況調査（中学2年生対象）</li> <li>小・中・高等学校合同研修会 （関東学院大学大学院 金森 強教授による講演会）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>組織確立</li> <li>研究計画の協議</li> <li>年間計画の協議</li> </ul>
5月	<ul style="list-style-type: none"> <li>第1回英語教育強化推進委員会（小学校授業見学）</li> <li>校内研修会（小学校）</li> </ul>	
6月	<ul style="list-style-type: none"> <li>小学校公開授業</li> <li>第1回授業研究部会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業研究</li> </ul>
7月	<ul style="list-style-type: none"> <li>第1回カリキュラム開発部会</li> <li>中学校公開授業</li> <li>校内研修会（小学校）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>カリキュラム開発</li> </ul>
8月	<ul style="list-style-type: none"> <li>第1回調査・研修部会</li> <li>有識者による指導案検討</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>カリキュラム開発</li> <li>評価研究</li> <li>調査結果の分析</li> </ul>
9月	<ul style="list-style-type: none"> <li>第2回授業研究部会</li> <li>有識者による指導案検討</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>評価研究</li> <li>授業研究</li> </ul>
10月	<ul style="list-style-type: none"> <li>高等学校公開授業</li> <li>第2回調査・研修部会</li> <li>常葉中ブロック研究発表会（小・中学校授業公開）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>評価研究</li> <li>調査研究</li> <li>授業研究</li> </ul>
11月	<ul style="list-style-type: none"> <li>第2回カリキュラム開発部会</li> <li>第3回調査・研修部会</li> <li>第3回授業研究部会</li> <li>高等学校授業公開</li> <li>他地域の視察（沖縄県・徳島県）</li> <li>外部試験実施（中学校3年生）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>カリキュラム開発</li> <li>評価研究</li> <li>調査研究</li> </ul>
12月	<ul style="list-style-type: none"> <li>第2回英語教育強化推進委員会</li> <li>第4回調査・研修部会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>調査研究</li> <li>視察の報告</li> </ul>
1月	<ul style="list-style-type: none"> <li>第4回カリキュラム開発部会</li> <li>第5回調査・研修部会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>カリキュラム開発</li> <li>調査研究</li> </ul>
2月	<ul style="list-style-type: none"> <li>第4回授業研究部会</li> <li>第3回英語教育強化推進委員会（年間反省・次年度計画）</li> <li>中学校公開授業</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>年間反省（成果と課題）</li> <li>次年度研究計画</li> </ul>

3月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童・教員・保護者を対象とした意識調査</li> <li>・第5回カリキュラム開発部会</li> <li>・第5回授業研究部会</li> <li>・第6回調査・研修部会</li> <li>・外部試験実施（高等学校1・2年生対象）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・調査結果の分析</li> <li>・次年度研究計画</li> </ul>
<p>【その他の取組】※あれば記入</p> <p>*年間計画の「第1～第5回研究部会」は、上記の「第〇回カリキュラム開発部会」「第〇回授業研究部会」「第〇回調査・研修部会」として開催。</p>		